

県民会議会長賞 「誰のために生きるのか」 藤永 まどか

私の母は、自分のことを後回しにしても、人のために頑張ることができる、そんな人です。私が生まれたフィリピンでは、毎日がギリギリで生活に苦しんでいる人がたくさんいます。母はそんな貧しい人を見つけると、ご飯をあげていました。

私たち兄弟四人と両親は今、日本で暮らしています。みんなで韓国旅行に行った時も、母は道端のおじいさんにお金を渡しながら泣いていたのです。母国にいる両親に仕送りをしているので、自分の両親と重なったからなのでしょう。ご飯を残そうとすると、世界にはご飯を食べたくても食べられない人がいるのだから、きちんと食べなさいと言います。幼い頃の貧しい生活を目の当たりに見てきた私なのに、食べ物を粗末にしている自分がいるのです。恵まれているはずの生活までも満足しない自分がいたのです。お金に困っていないのに、どうして忙しくしているのか聞くと、ずっと一緒にいてあげられるわけじゃない。私たちがいなくなっても困らないようにしたいから。今の生活も当たり前ではない。すべてのことに感謝して生きていきなさいと。

私は、母のこの言葉をずっと心の奥にしまっています。まだ一度も親孝行をしていません。母が教えてくれていることは、誰かのために生きることの大切さと、当たり前が当たり前でできることへの感謝なのでした。



「家庭の日」賞 「家族のカタチ」



私は母子家庭で育った。こう聞いたら人々は「大変だね。」「つらいのにえらいね。」などと同情の言葉を並べる。

私が小学三年生の時、両親は離婚した。もちろん離婚し、別々に暮らしはじめた当初はさみしくて複雑な思いだった。世間の離婚した家庭のイメージは別れたら二度と顔を合わせなかったり、冷めきった複雑な関係という感じだと思う。だが私の家族は少し違う。別れて数年経った今でも、週に数回、家族全員で食卓を囲む。家族旅行も全員でいく。すごく不思議な家族だ。

だが、こうしていただけるのも両親の努力のおかげだと思う。私の両親はお互いが幸せしているためにその選択をしたのかもしれない。多様さがみとめられてきた今の日本で、お互いを考えた離婚も一つの選択なのかもしれない。

私には忘れられない思い出の光景がある。それは私の両親が二人で授業参観に来てくれた日の両親の姿だ。他の人とは違う道のりを歩んできた両親の並んで授業をながめる姿は一生私の思い出として残りつづける。



「家庭の日」賞 「娘と私と主人と絵本」



娘が中学生の時、家庭科で保育所を訪問したことがありました。その訪問には課題が各々あり、「絵本の読み聞かせ」が娘の課題でした。

対象は年少さん。そして選んだのは「わにわにのおふろ」という作品。私は我が子ながら「センスいい!」と感心しました。

子どもに人気のこの絵本は、私もよく子どもに読んであげたものです。私は、小さい頃の思い出の一冊を選んだに違いない、と意気揚々に「よく読んであげたもんね」と娘に言いました。

すると娘は「?」と不思議そうに私を見つめ、そして一言「ママに読んでもらったことあったっけ??」。「はあ??(何言ってるの?)」と私はなり、その後はあれも読んだこれも読んだ、と怒涛のごとく訴えました。

娘は「ごめん、ごめん」と苦笑いし、こう言ったのです。「絵本はね、パパが読んでくれたことの方が覚えちよるの。だって、絵本を面白く読んでくれたり、それでごっこしてくれたり…」。「わにわにのおふろ」は、わにがシャワー片手に歌をうたったり、洗面器を頭に被ったり、とにかくユニークなお話なのですが、主人はどうも本当にお風呂で子どもたちとしていたようなのです。

「パパと洗面器被って踊ったわー」と思い出し大笑いする娘。パパの読み方とお風呂で遊んだ事を思い出しながら読んだ絵本は、大ウケだったと自慢気に話してくれました。そんな娘も春から県外の大学へ。辛いとき家族の温かな思い出が心を和ませてくれると願ってます。



しまニッコ賞 「逝く母の姿」 山崎 一由



母が三十六歳の時に父が亡くなっているのに、母には百歳は生きて欲しいと言うのが、私の口癖であった。対し母は、九十迄生きたのだからえかろうが、と言うのが常であった。

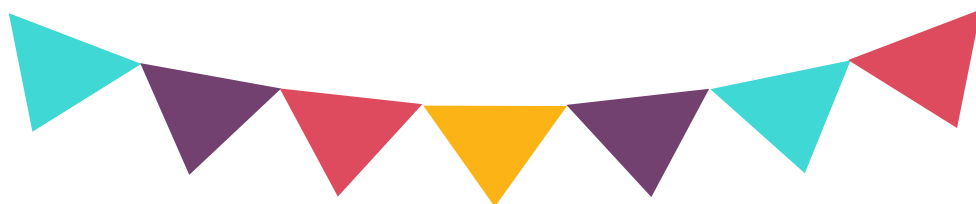
亡くなる十日位前に、とっくの昔に亡くなっている母の生母が、ベッドの傍らに立っていると言う。咄嗟に、人が亡くなる時に親しい人が夢枕に立ったり、迎えに来てくれる姿を見る事は、一番幸せな亡くなり方だとある TV 番組の解説者が言っていた事を思い出した。

更に母は、亡くなる迄に何事があっても驚くなと三度言った。私が承知しているからと言うのに、不吉で嫌なのに南無阿弥陀仏の掛軸、打敷、香柴の話を確認してくる。

亡くなった朝も、トイレをすると言ったら立ち上がったが、そこで力尽きたのかベッドに再び倒れ込んだ。異変を察し、母の体中を叩くつねる押すが、一世の別れとなってしまった。僅か数秒数分前迄、口を利いてくれてたじゃないか。何事があっても驚くなと言われても、びっくるするよしてるよ!母さん。

母の焼骨を見て、こちらが聞かないのに、係の方が御高齢と聞いてますが、珍しい位綺麗な喉仏さんです、ね、きっとお幸せだったのでしょ…と仰って下さった。女手ひとつで育ててくれた母は苦勞が多かった筈だ。母さん幸せだったんだね。救われたような極上の慰めが涙となってしとどに零れ落ちた。

最期迄、人間の生きるのと死するを見せてくれたお母さん、有難う。



しまニッコ賞 「長男が島根に帰ってきた。」

H・U

長男が、愛知での仕事を辞め、島根に帰ってきた。

「結婚したい人がいるから。」聞けば、相手は、中学の同級生で、島根で就職しているようだ。

せっかく就いた仕事を辞めるのは反対したいが、そういうことなら賛成せざるを得ない。

なによりも、長男が『人を愛する』ことができる人間に成長してくれたことが、何よりもうれしい。

長男が小さい時、いろいろなところに連れて行った。かわいらしくてかわいらしくて、何度も何度も意味もなく抱きしめた。

その後生まれた長女と次女も含め、夜は家族みんなで一列になって寝た。寝相がシンクロする子ども達を見て、嫁さんと笑いあった。あっというまの子育ては、本当に本当に幸せな時間だった。

まだまだ子どもだ子どもだと、思っていたけれども、思っていたかっただけどもいつの間にか立派になってくれている。昔、「お父さん、最高だ。」と言ってくれたのは、うれしくて今でも覚えている。

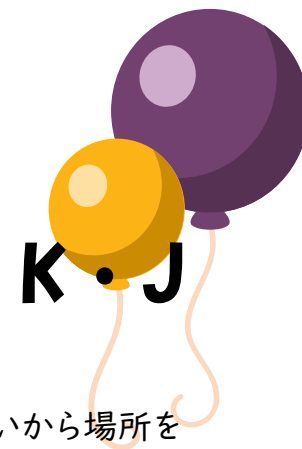
長男よ、嫁さんと仲良く。

そして、いつか、さらに家族が増えたなら、子育ての時間はあっという間だぞ、心して、でも楽しんでかかれ。

「お父さん、最高だ。」と言ってもらえるよう、がんばれ。



しまニッコ賞 「ベビーバス」



我が子が新生児の時に使ったなつかしのベビーバス。

それはそれは今の時代の空気で膨らむものとかと違って、プラスチックでできているし、大きいから場所をとるし、重い。

でも、このバス様の履歴書見ましたら、私の父の姉(叔母)の長男、次男、父の長女(私)、長男(私の弟)、次女(私の妹)、父の妹(伯母)の長男、長女、次女、そして私の長女、次女、私の妹のとこの長女、長男、そして最後、私の長男と、計13人。

なんともたくさんの赤ちゃんを見守ってきてることか。

自分も入っていたベビーバスを、我が子も使うことになるとは思いませんでした。

だいぶ年期入っていて、ところどころプリントがはげてるけど、子どもたちがベビーバスに入っている写真を見ると、なんともいえない、懐かしさと、うれしさと、大事に使い保管してくれてた母やおばさん達への感謝。

そしてこれを我が子も使ってほしいという思いもあります。

そこまでベビーバス様、長生きしてくださるかしら。



入賞 「母と娘の家出と祖父と孫」



いつだって母が正義だった。家の中では良妻賢母。家の外では賢婦人。仕事・家事・学校行事に地域活動。今にもパンクしそうな気持ちを隠して、ひたすら動き続けていた。

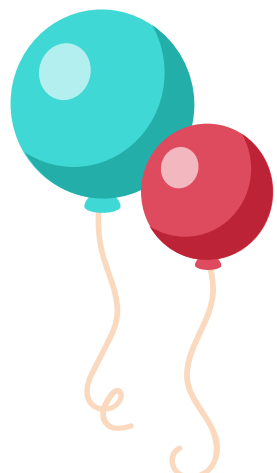
そんな絵に描いたような完璧な母が家出をした。

それは私が大学生の頃、今からもう二十年も前のことだ。夏休みを利用して実家に帰省した時、我が家最大の夫婦喧嘩が勃発した。楽しく囲むはずの食卓に父の姿がなかった。悪いのは父だ。父は友人とお酒を飲み、カラオケで朝までコースを楽しんだのだ。

それに呆れた母は次の日、二日酔いの父が起きてくる前に私の手を取り県内観光ツアーという名の家出をした。行先は前から行ってみたかったというフォーゲルパークとルイス・C・ティファニー美術館。それから堀川遊覧だ。公共交通機関を使って行く家出を迷子になったり乗り越したりしながら楽しんだ。最初のフォーゲルパークのペンギンのお散歩は愛らしく、梟やその仲間たちの芸達者なステージには子どものようにはしゃいだ。それからバスに乗って美術館へ行き、タクシーに乗って堀川遊覧場へと急いだ。弾丸日帰り家出だったがいい思い出になった。

その日だけは、地球上で“私が主役”の気分で盛り上がった。

この家出のことをずっと覚えていて、十年後に父は孫と夏休みに同じコースを回って楽しんだことも我が家のいい思い出になった。

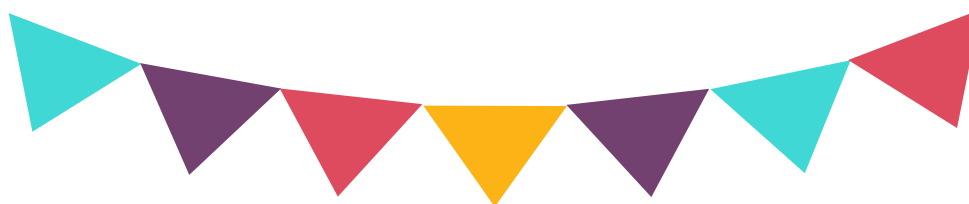
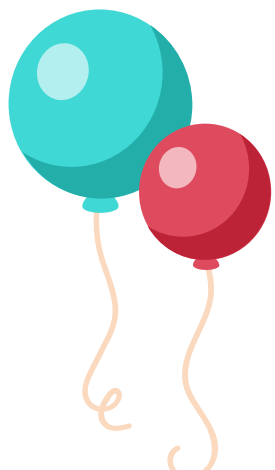


入賞 「僕の姉」

居山 隼梧



僕には、2つ歳のはなれた姉がいます。でも、僕の姉は世間的に見たら普通の姉では無いかもしれません。自分の姉は療育手帳Aの重度の障害を持っています。自分の意思を他の人に少ししか伝える事が出来ず、コミュニケーションを取るのがとても難しいです。でも、自分は姉ともう10年以上一緒に暮らしてきているため、姉が少し何か言うだけでも何を伝えたいのかをすぐに理解することが出来ます。それは、自分だけでなく、家族もです。自分の家では、さまざまな場面で姉のために家族が協力しています。姉がこぼしてしまった食べ物は自分や弟が気付いて掃除をするし、姉が中々寝られない時は、両親ががんばって寝かしつけるし、お風呂も、はみがきも、食事も、着替えも、他の人からしたら、毎日なにげなく生活の中でやっている事かもしれない。だけど自分達家族の中では、一日一日が家族の協力で出来上がっている大切な姉との思い出となっています。もしかしたら、これから先、両親が姉の事を見られなくなるかもしれない。でも、その時は、自分が姉をちゃんと見てあげる番だと思うから、一日一日を大切に姉と過ごしていきたい。



入賞 「お弁当」



ママー!!遠足の日のお弁当は何を入れるのー?

嬉々として聞いてくる我が子。

幼稚園児の彼は肉が大好き、肉食男だ。野菜は何が食べやすいかなと頭を悩ます。同様に、小学生の長男の弁当も、頭をひねる。

弁当箱ぎっしりにおかずを入れて、おにぎり3つ、持たせても、足りなかったー!と帰ってくるのだ。小学生の食欲は恐ろしいものだ。

母になって、弁当を作ることも、おかずを考えることも、小さなカップにおかずを詰めることですら、大変だと気付いた。

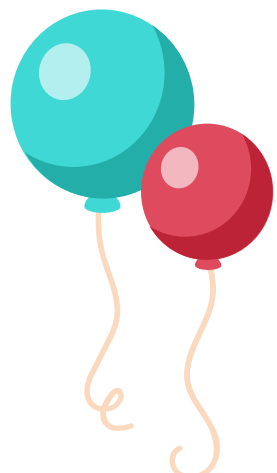
高校生になると、毎日が弁当だ。かつての私も毎日作ってもらっていた。ご馳走様、ありがとうと母に伝えていただろうか。

学校を休んだ日でさえ、弁当は作られて包んであった。毎日作り続けてくれた母には感謝してもしきれない。

中でも、母の作るハンバーグが好物で、何度もリクエストした。炒めて、こねて、小さなサイズに丸める手間ものをその度に作ってくれた。玉ねぎ以外の野菜もみじん切りにされ、こねられていたのは、野菜を食べて欲しいと願う母の思いからだろう。

母の弁当を食べてきたからこそ、子供達にも弁当を作ってやれている気がする。

あの頃に食べた味を思い出しながら、ハンバーグをこねてみようと思う。



入賞 「心強く生きる」

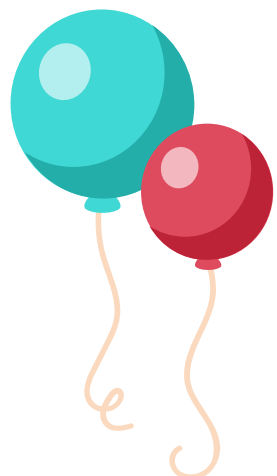
堀井 幹太



野球がしくて京都から島根の高校へ来た今年の六月、父から一本の電話で「おばあちゃんが亡くなった」と。夏の大会とコロナもあって、大好きだった祖母のお葬式には行けませんでした。引退して真っ先にお墓の祖母のもとへ行き、「ありがとう、そしてゴメンね」と言いました。兄と姉は社会人で直ぐ上の兄は学生で、僕は四人兄弟の末っ子です。小学生の時、交通事故で車いす生活をした僕を家族全員が側について支えてくれました。経済的に負担をかけるのではと思いながら、大学で野球を続けたいと言うと「やりたいと思うなら頑張りなさい。」と父はすんなり言ってくれました。本当に平穏な家庭でした。

しかしこの九月、両親とも大腸ガンだと宣告されたのです。母が先に手術をして数日後には父が手術。ふたりとも一命は取りとめました。ふいに襲ってきた恐怖でした。僕の母は、手先が器用で靴や服など何でも作ります。母の「大丈夫だよ」という言葉に僕は心が落ち着いて「ありがとう」と答えました。

大切な人を失ってから後悔することのないよう父と母を大切にして、感謝の気持ちを素直に言動で伝えたいと思います。次から次へと心が折れるようなことばかりで、高すぎる山や暗くて厚い壁がたくさんやってきますが、その先にある「希望」に向かって、これからも前を向いて歩み続けていこうと思います。



入賞 「湯気の向こうに」

飯塚 典子



鍋からもわもわと沸き上がる湯気の向こうに、こどもが眠っている。対面式のキッチンカウンターに立つと、向かいの部屋の真ん中で規則正しく上下する身体が見えた。

やっとである、…寝た。夜中に何度も目を覚まして(必然的に親も目を覚まして)いたのに、眠たい気配は全くない。だから、少し早めの昼食を食べさせて、お昼寝をしようと声をかけたが娘は渋い顔である。1時間ほど遊び、一瞬だが眼がとろんとしてきたところを見逃さずに抱っこをする。

ずいぶんと時間が経つ。腕がしびれてきた頃に、娘と私の体温が解け合ったと感じた瞬間、寝息が聞こえた。起こさないように、洗濯物を畳んで、夕食の準備をする。気づけば湯気かと思ったものは、こみ上げてきた自分の涙である。

もっと上手く、穏やかにやれると思っていたのに、追いかけてくる日々に埋もれていく「理想の毎日」。これからも、私は目の前に立ちはだかるそれが湯気か、自分の涙かもわからない日々を送るのであろうか。永遠に。出口の見えないトンネルの中で。

――あれから、子どもは成長し、私も同じく年を重ねた。「お母ちゃん。私、先に出てるね。早く来てね」私はよく家族で利用する、日帰り温泉にいる。

湯気の向こうに満面の笑顔。ただただ、寝て、起きて、泣いて、笑って、そして必ず朝がやってきた。特別な事は何も起きない日々が今の私を支えている。

いつも当たり前のように湯気の向こうにしあわせがある。